平成12年（2000年）6月1日毎月1回1日発行　協力　CAL／松竹京都映画撮影所／大映ビデオ／東宝／TOWANI／WOWOW

Kyoto Hollywood News 京都ハリウッド通信

痛快！役所広司が50人斬りに挑戦！30年ごしの企画・京都で実現！「どら平太」

「どら平太」はかなり凄い。どれほどに凄いかと言うと、まず脚本が期待外れ、木下恵介、市川崑、小林正樹という日本映画界の最高峰に位置する4人の巨匠による共作である点。'69年、日本映画の斜陽を憂いた4巨匠は、「日本はもとより世界の観客となる映画を作ろう」と、「四騎の会」を結成、その第1作に選ばれたのが山本周五郎作「町奉行日記」を原作とした「どら平太」。

そして何より凄いのは企画の構想30年を経て実現するという、まさに夢の企画だった。そこに当時、予定されていたキャストが三船敏郎、萬屋錦之助、石原裕次郎、勝新太郎という面々。これが凄いと言わずになんと言おう。

しかし、映画化の機会に恵まれないまま、巨匠たちは次々に物故し、一人残った市川監督が今回、仲間の意志を継いで実現の運びとなった。

そのきっかけとなったのが役所広司。テレビドラマで市川監督と会った役所が「市川監督の時代劇に出演したい」と熱望したのだ。こうして役所を始め、浅野ゆう子、宇崎竜童、片岡鶴太郎、石倉三郎、うじきつよし、尾藤イサオ、大滝秀治、加藤武、神山繁、三谷昇、岸田今日子、菅原文太という豪華出演陣による、豪華超娯楽大作が完成した。

見せ場は何と言ってもクライマックスで役所が繰り広げる50人斬りの大立ち回り。市川監督はカットが進むにつれて、背景がより深い間になる様に工夫。だんだんに刀だけが浮かぶ、ストロボ効果の様な象徴的な画面になる様に演出。

ただし、殺陣は峰打ち。「残酷な殺陣は一この作品にふさわしくない」と、あくまで美にこだわった市川監督の、究極の美学が冴え渡る！

©「どら平太」製作委員会

「どら平太」ストーリー

ある小藩に新任の町奉行が赴任する事になった。その人物の名は望月小平太（役所広司）。小平太は不埒なふるまいで「どら平太」とあだ名される評判の悪い男だった。しかし、その悪評は小平太本人が友人の大目付・仙波義十郎（宇崎竜童）に頼んで、わざと流させていたのだ。

小平太が赴任するはずの奉行所の管轄である「壕外」と呼ばれる一画は、あらゆる犯罪が横行する治外法権エリアと化しており、大川岸の灘八（菅原文太）ら3人の親分によって分割統治されていた。

小平太は奉行所には赴かず、遊び人として壕外に潜入。毎晩の様に放蕩を繰り広げつつ、情報を収集していた。

©「どら平太」製作委員会

「もし3人の監督が完成作品を見られたら、どの様な評価をされると思いますか？」との質問に「うーん、めちゃくちゃに言われたろうねぇ（笑）」と市川監督

浅野ゆう子が演じる芸者のこせいは、新たに書き加えらえたキャラクター。理由は「女っ気が少ないから（笑）」と市川監督

「とにかく市川監督と時代劇をやりたくて」と、感無量の役所広司

©「どら平太」製作委員会

市川美学の極致、どら平太壮絶50人斬り！　マスコミには伏せられたが、役所はこの場面で右足首を捻挫、病院へとかつぎ込まれた